

精神分析学

文科一類 履修先輩

2017年Aセメに開講された原先生の精神分析学です。

まずは試験の構成です。基本前バラシです。問題用紙は回収されてしまいますが、確か語句説明は10個くらいの中から3つくらい選ぶものだったと思います。なお、毎回の授業にあるコメントシートも点数に含まれているようなので、進振りのために高得点が欲しい方はちゃんと出しましょう。

1. ○×あるいは選択問題 10問 (20点)
2. 語句説明 3問 (各三行以上の記述) (20点)
3. 記述式問題 (15点の小問 2題 + 30点の大問 1題 = 60点)

以下は3の論述テーマと簡易的な解答です。後半の部分はあまりに難しすぎて理解不能でした。(しかし試験ではかなり自由に問題が選べるため、前半部分がきっちり理解できてそれを確実にアウトプットできれば優上がきます。)

易 ヨーロッパにおける「ヒステリー」概念の形成と展開 (第2回)

古代ギリシャ (ヒポクラテス) においては、ヒステリーは子宮に原因があるとされ、その解決策としてその女性患者の子宮に生殖機能を果たさせることが考案された。18世紀になると、**ガスナー**は、宗教的な影響で、ヒステリー患者は悪霊に取り憑かれた魔女とみなし、それを払えば症状は改善するとした。そ

の後、**メスメル**が動物磁気に注目し、患者に分利を誘発してその流体の分布を変えることで軽傷化する治療法を考案した。この治療法に対しては、身体的な接触があるため性的な危険が伴うという批判があり、動物磁気から催眠へと移行していった。18世紀末から、臨床解剖学が発達し、解剖によってヒステリーの原因を突き止めようとする機運が高まった。**シャルコー**は、神経学の観点から観察を行い、症状や兆候をまとめた臨床表を作成した。また、ヒステリーの症状を人工的に創出することによってもその原因を突き止めようとし、性的な不満とヒステリーを結びつける考えを示した。**ジャネ**は、心理的な観点から、意識野の狭窄が症状を引き起こすとした。**バビンスキー**は、ヒステリーとは暗示によって引き起こされるとし、それは説得によって治癒可能だとの見方を示した。

易 ヒステリー研究の病因論：フロイトによる推論（第3回）

元は神経学や精神科であり、幅広い知識を有していたフロイトは、ヒステリーに関するブロイエルらの講演をきき、ヒステリー研究の道を志した。フロイトは、言語に注目し、原因となったトラウマとヒステリーの症状との間に首尾一貫した関係があるとした。まず、その原因となる苦痛な体験があり、それに対

し何らかの理由で反応できないと、それがトラウマとなる。ここでの除去阻害の理由としては、性に対する抑圧的な環境や、性的発育の遅れがある。トラウマ的な出来事の裏には、性が関わっているとフロイトは考えた。そのトラウマに対し、言語化などの反応がなされなければ、症状は反復するとし、逆に、情動を伴った形でその経験を言語化すれば、言語化が行為の代替となり、徐反応が起きて症状は解消する（損耗）、とした。

・「トラウマ」概念の成立とフロイトの考え方の特徴（第4回）

フロイトは、トラウマ的体験の根底には必ず性があるとし、その原因として、事後性に注目した。人間の性は、何も思春期から特に意識されるものではなく、幼少期から存在するものであり、幼少期に体験した性的な経験に対し、その当時は知識の欠如などが原因で反応することができないため、除去が生じず、当該人の心の深い部分に強い情動的価値が残り続ける。そしてそれは**防衛**や**転換**といった心的機構によって簡単には想起されないため、症状が継続すると考えた。また、トラウマは、より小さなトラウマが、大きなトラウマと複合し一体となってヒステリーを生み出すと考え、その時、より大きなトラウマは

性と密接不可分だとした。このような考えから、フロイトは、催眠に変わる療法として、患者が思い浮かんだことを全て告白する自由連想法を提案した。

易 誘惑理論からエディプス・コンプレックス理論へ（第5回）

ヒステリー研究前後、フロイトは誘惑理論、つまり性的な働きかけを大人が行い、子どもはその影響を被る、というものを考えていた。しかし、フロイトの父が亡くなった時、自身の分析を行ったことがきっかけで、エディプス・コンプレックス理論へとシフトした。エディプス・コンプレックス理論では、自分の母への愛着と父親への敵意という葛藤的な愛と、欲望する主体の変更、空想の重要性がカギとなっている。父親への敵意はあり同時に、父親への根源的な情愛も持っているとした。2番目の点は、子どもが欲望の主体となっている、という内容である。また、空想（夢）は、現実には達成できない欲望を実現する場所として捉えられた。こうした理論転換から、夢が一つの独立した研究対象へとなくなっていった。

・『夢判断』における「解釈」の問題（第6回）

フロイトは、夢を、無意識のうちにある欲望やトラウマの表出と捉え、それを自由連想法によって解釈しようと試みた。人は、そうした欲望やトラウマを心

の奥底に有しており、それは睡眠時になると意識上に出てこようとする。しかし、検閲機能が働いて、その結果として夢歪曲が起こる。そしてそのねじ曲げられた内容が意識される。この内容を解釈するのは容易ではない。というのも、夢によって圧縮・移動され、視覚像へと翻訳されているからである。このような困難さから、分析家が伝える解釈が間違っている場合や、患者に受け入れられない場合もあり、その結果として転移という問題がクローズアップされてくることとなった。

難 「転移」とフロイト理論の展開：技法論と発達論（第7回）

分析を行う中で、患者に反発を受け、その内容が歪められたことに注目し、転移にスポットが当てられるようになった。転移とは、患者の分析を行う中で、かつて患者が経験した出来事を、目の前にいる医者との関係で再現する、というものであり、自身の欲望をむき出しにされることへの抵抗である。転移には陰性と陽性があり、前者は連想を鈍らせ、後者は分析家が興味のある方向性のみ連想が向かう、というものである。分析家は、こうした転移に引きずられて偏った分析をおこなったり、逆転移を起こしたり、転移を現実化したりして

はならず、それを防ぐには、分析家自身も分析を受けることが必要である。こうした一連の事態から、トラウマ的出来事によって、過去に起きた固着を維持したまま発達したことがヒステリーなどの原因と考える理論が生まれた。それがリビドー発達論である。リビドー発達論の特徴として、『発達段階をいくつかに分け、リビドーを実現する身体の部位に応じて、口唇期、肛門期、男根期などに区分されること』と、『自我欲動と性欲動との対立』が挙げられる。

理論	誘惑→（父の死後に自己分析）→エディプス→（転移）→リビドー
療法	催眠→（催眠の困難）→自由連想法

・1920年の転回：「快原理」とその「彼岸」（第8回）

1900年以降、精神分析は分析家集団や対象領域を拡大していたが、そこで危機に直面した。一つは分析への抵抗（臨床の危機）、もう一つはナルシズムの問題である。こうした危機への対処として、快感原則の彼岸・第二場所論が生み出された。快感原則とは、快感を積極的に受容し、苦痛を避けるという原則のことである。第一次世界大戦に行って戦争神経症になった人は、この快感原則では説明できない症状、つまりフラッシュバックや悪夢など、本来なら忌

避されるべき苦痛がぶり返す症状に苛まれていた。快原則の彼岸では、不安の発生が途絶えたことが神経症の原因で、不安を発生させることで刺激を統御しようとした、と捉えた。自我欲動と性欲動の対立から、生の欲動と死の欲動の対立に変化した。また第二場所論では、エス、自我、超自我という3つの働きが存在し、エスは欲動の源泉、自我は自我を抑制する現実原則、超自我は父親を同一視することで獲得される良心や道徳観である、とされた。

☐ フロイト思想のフランスへの移入：1950年代まで（第9回）

1910年頃から、フロイトの思想はフランスにも浸透し始め、1922年頃に、フロイトの分析に理解を示す分析家も現れた。フロイトの影響を受けた人物のうち、最も主要な人物の一人がラカンである。

☐ 30年代のラカン：パラノイア、鏡像段階、主人と奴隷の弁証法とイマージュ（第10回）

欲望の公準とは、他者が自分と同じように欲望していることを欲望することで一種の想定である一方、欲望の欲望は、欲望するのが明らかな他者が欲望することを欲望する。

鏡像段階とは、生後6～18ヶ月の子どもが鏡に映る自分を見たときに特徴的な反応をすることに注目し、これを自我機能の成立を意味することだと考えたことを指す。自分は統一された一人の人間なのだということを、鏡という外部にあるものを通して始めて認識できるということである。

その他のテーマ

- ・ラカンによる「言語」の再規定：「シニフィアン連鎖」—その成り立ちと基本的発想
- ・ラカンによる「エディプス」：「欲望の弁証法」（第12回）
- ・「リビドー」のラカンの区分：欲求、要求、欲望、欲動、享楽

これらはかなり難しく理解できませんでした。わかる兄貴達がいればシケプリ作って補足してください！オナシャス！

- ・おまけ的な語句説明

イマージュ…ある事物に対し、特定の姿を想像するという意味。

イマーゴ…他者に重ね合わされ、他者との関係を媒介するもの。欲望の相関項でもある。人間自我とその精神同一性が、他者を通して成り立っているとする考え方。

パラノイア…不安や恐怖の影響を強く受けており、他人が常に自分を批判して

いるという妄想を抱くもの

転換 身体症状への変更

防衛 自我と相容れない表象を追放する

白昼夢 覚醒状態において想像される欲望成就のシナリオ

シニフィアン…聴覚映像。言語はそもそも存在するために解釈を必要とする、

つまり他者を必要とする。シニフィアン連鎖